

《国際シンポジウム報告》

地域認識としての東アジアとアイデンティティ

小 風 秀 雅
貴 志 俊 彦

1. 「東アジア」の地域アイデンティティ
2. 東アジアの基軸と周辺
3. 東アジアとは、いったい何か？

本稿は、2004年5月15日に立教大学で開催されたシンポジウム「地域認識としての東アジアとアイデンティティ」における報告・討論をもとに作成されたものである。

本シンポジウムは、立教大学日本学研究所と日本学術振興会科学研究費による国際共同プロジェクト「不平等条約体制下、東アジアにおける外国人の法的地位に関する事例研究」（代表：貴志俊彦・島根県立大学）との共催によって開催された。司会是小風秀雅（お茶の水女子大学）、報告者及び報告テーマは下記のとおりである

報告者と報告テーマ

- ① 荒野泰典（立教大学）「『東アジア』の発見とアイデンティティ」
- ② 金 鳳珍（北九州市立大学）「連帯と自主の相克－近代朝鮮思想史における東アジア連帯意識の漂流と失踪－」
- ③ 貴志俊彦（島根県立大学）「『大東亜共栄圏』構想の解釈」

コメンテーター

- 羽田 正（近世西アジア史；東京大学）
- 弘末雅士（近世・近代東南アジア史；立教大学）
- 石崎 等（近代日本文学；立教大学）
- 豊見山和行（琉球史；琉球大学）

上記のように、このシンポジウムは、日本史の立場から荒野泰典氏、朝鮮史の立場から金鳳珍氏、そして中国史の立場から貴志俊彦氏が報告者となった。また、これらの報告に対するコメンテーターとして、西アジア史研究の立場から羽田正氏、東南アジア史研究の

立場から弘末雅士氏、琉球史の立場から豊見山和行氏、日本文学の立場から石崎等氏が報告に関する問題提起を行った。これに加えて、フロアーには歴史学者、民族学者、文学者、政治学者などさまざまな分野の研究者が参加して討議したため、話題になった問題は広範囲に及び、また多くの新しい視角や課題が提起された。それぞれの内容は、次章以下に詳細に述べられているため、ここでは当日のテーマである「東アジアの地域認識とアイデンティティ」に関連して提起された二つの問題、すなわち「東アジア」なる地域概念を外から考える方向と、内から考える方向について考えてみたい。

1. 「東アジア」の地域アイデンティティ

本シンポジウムでまず採り上げられたのは、東アジアの地域認識の登場、その呼称、その範囲の問題であった。すなわち、現在、日本で東アジアと呼ばれる地域は、日本、韓国・朝鮮、中国・台湾をさすが、これらをひとつの地域として括ろうとする認識はいつ登場し、どのような呼称が付与されたのか、という点について討議された。

周知のように、アジアという地域概念は、ヨーロッパから外的に付与されたエリアとしての呼称である。アメリカやヨーロッパにおいては、本シンポジウムが議論の対象とする東アジアは、東南アジアと対になる北東アジアという概念で理解されている。報告者の一人、荒野泰典氏の指摘によれば、「東アジア=East Asia」という表現はおおむね第二次世界大以降に登場したものであり、それ以前は“Far East”という呼称が一般的であって、明治前期の日本における「亜細亜東方」という名称に呼応していた、という。

さて、東アジアという地域認識を、世界観の視点から図像的にアプローチしたのが、荒野報告であった。荒野氏は、東アジアという呼称が、自称として存在しなかったかといえ、決してそうではなく、明らかに歴史の実態がある、と主張する。周知のように、実態としての東アジアについては、西嶋定生氏の「冊封体制論」において提起されたキー概念として、漢字文化圏、儒教・仏教・道教文化圏、冊封体制などが、それを示すものとして指摘されてきた。東アジアという概念を歴史的にみれば、西川如見に見られるように18世紀にはその実態が確認され、その概念が東アジアという表現で定着してくるようになるのは19世紀の末である。この時期注目すべきは、東アジアを示す表現として“東洋”という呼称が登場することであろう。現在、東洋という表現は、微妙な揺れを内包しつつもアジアとほぼ同義で使用されるが、当時は“亜細亜”という表現とは明確に使い分けられている。それゆえ、東洋は、中国、日本、朝鮮に関わる地域を指すもの、いわゆる東アジアを示す呼称として誕生したものといえる。この点は、コメンテーターの羽田正氏が指摘したように、明治中期に成立した東洋史のなかに西アジアが含まれていないことも、傍証となろう。近代の東アジア認識は、こうした近世において育まれた要素を継承しつつ、近代の国際関係のなかで、新たな要素と合体することによって形成されたものである。

しかし、東アジアないしは東洋という呼称は、その後の歴史を想定すれば明白のように、

地域呼称として確立したものではなく、あきらかに視点や立場、時代によって伸縮してきた。そうした点から考えれば、東アジアという概念は、周辺世界の地域概念の形成と緊密に関係していると考えられる。とくに東南アジアと西アジアとの比較の重要性については、羽田正氏や弘末雅士氏から、以下のような重要な論点がコメントして指摘された。

弘末氏は、東南アジアという地域概念について、元来他者から付与されたものがやがてみずからのものとして定着し、ASEAN10カ国となって、東南アジアの実態ができていく、そうしたアイデンティティ形成における遠回りのプロセスを指摘された。このうち、他者という点では、中国で“南洋”と称されることに見られるように、東南アジアという地域概念を付与したのは中国であり日本であったことも紹介した。さらに、南洋のとらえ方が変化した大正期に東洋自身の概念も変化した、全アジア的規模に拡大していくのではないかと、この問題を提出した。南洋という認識については、コメンテーターの豊見山氏も、東南アジアとの交易や交流が盛んであっても、近世の認識では、同じ地域として理解されないのは何故か、という疑問を提出した。

一方、羽田氏は、東アジアと西アジアのアイデンティティとを対比し、日本と同じアジアであるというアイデンティティはあるが、西アジアという地域アイデンティティはまったく意識されていないとして、西アジアの特徴として、イスラムに還元されない多種多様なアイデンティティの存在を指摘した。とくに国の概念のやわらかさを提示し、東アジアのまとまりという感覚は東アジアに独特のものかもしれない、と指摘された点は、両地域のアイデンティティの特質を比較史的に浮き彫りにするものであった。これに対して、荒野氏は、実態としての地域はあった、しかし本来アイデンティティとしては、複数のものがありうる地域概念が、東アジアにおいては何故統合されて国になってしまうのかが重要であるとして、「まとまり」のアイデンティティの面で、西アジアと東アジアの相違点として、国家意識の違いを指摘した。

こうした地域呼称および地域概念の有無あるいは伸縮の問題については、当然のことながら、地域をどう認識するか、ということと密接に関係している。そこで漢字文化圏であるベトナム（安南）が東アジアに含まれるのかという点が議論の口火として採り上げられたが、それ以上の議論の進展は見られなかった。これに関連して、アジア諸地域の呼称の変化が、国際政治、国際関係の変動や、周辺世界との交流のあり方の変化と緊密に結びついていることは、多くの出席者から指摘されたことを付言しておきたい。

日本に則して言えば、弘末氏は、南洋と呼んでいた地域を、1919年に初等・中等教育の教科書において東南アジアと記述するようになり、日本の主導者としての役割が強調されるようになったことを紹介された。また羽田氏は、日本ではじめてイスラムについての研究が盛んになるのは、1930年代半ば過ぎであり、日本の南方進出につれて、ムスリム＝回教圏に対する関心が高まったこと、それが第二次大戦とともに雲散霧消してしまったことを指摘して、政治と研究の関係の強さを強調された。さらに、研究が国家動向の後追いを

している点は、日清戦争期に中等教育において東洋史という教科名が採用され、研究対象として定置されたのが（東京帝大で支那史学が東洋史学に改称された）、1910年の日韓併合の年であったという一連の歴史過程と連動した動きであることは興味深く、比較史的にも重要な指摘であった。

2. 東アジアの基軸と周辺

第二の問題は、東アジア圏域内における地域相互の関係という問題である。

東アジア概念の柱のひとつである冊封体制は、19世紀に著しく動揺し、日清戦争による朝鮮との宗属関係の消滅によって崩壊した。東アジアの主導権をめぐる日本と中国との国際的な対抗関係は、征韓論政変と台湾出兵により明確化し、近代国際法的国際関係の樹立を求める日本と、東アジア世界における伝統的な冊封体制の存続を期する中国との間の確執は、その後、朝鮮をめぐる激化していった。

近代における東アジアの基軸としての日本と中国における東アジア認識の比較は、基軸国としての主導権争いのプロセスのなかで論ずることにより、非常に興味深い論点が明確になると考えられるが、もうひとつ、この二国以外に東アジアに含まれる地域においてどのような東アジアのアイデンティティが形成されたのか、という問題がある。

金鳳珍報告では、(東)アジア認識そのものが朝鮮においてひとつのまとまった言説空間をつくってはいないが、1900年代には、日本の影響下に東洋という表現を使用して東アジア三国の連帯論を語ることが広まってくる、との指摘がなされた。さらに、金氏は、三国連帯論の歴史的系譜について分析した。氏が指摘する「文明開化は朝鮮では使わない」というような近代化に対する抵抗感、日本との連帯と抵抗という緊張関係のなかでリージョナル・アイデンティティを生み出すことに失敗したという点は、東アジアの周辺他地域との比較の上できわめて重要な論点である。

冊封体制の規制力を強く受けた朝鮮、琉球においては東アジア認識が欠落していた、あるいは希薄であった。この点について、金氏は、「東アジアのなかに浸りきっている」状況では、アジアのなかの朝鮮という意識はなかなか生まれない、と指摘した。これに関連して、豊見山和行氏は、琉球の場合にも、中国、日本への従属関係が強化されるなかで、関係性を自生的につくり出していくことができなくなり、それ以上の地域認識、世界認識に至らなかった、とコメントしている。

近代朝鮮における地域認識の上で日本との関係が問われなければならなかったのは、近代東アジアにおける日本のプレゼンスが急速に強化されていったからに他ならない。日本との関係抜きに東アジアを語ることが事実上不可能になっていくなかで、それを相対化する言説が誕生せず、リージョナル・アイデンティティを生み出しえなかった主体の問題もさることながら、あたかもアジア認識が不在であるかのような言説状況が現出した歴史状況こそが、問われなければならないであろう。

この点からみれば、1930年代から40年代にかけての日中関係にも、ほぼ同様の強制関係が成立していた、といえるかもしれない。この場合は、東洋という表現ではなく「東亜新秩序」あるいは「大東亜共栄圏」という政治的イデオロギーによって表現された歴史的コンテクストはまったく異なるものであったにせよ、「押しつけられた地域主義」という意味においては、類似の機能を有していたといえる。

この点を、メディア媒体における論調から分析したのが、貴志俊彦報告であった。1930年代の新国際秩序の模索のなかで、民間、在野の知識人のなかにある種の理想主義的なアジア主義が台頭し、アジア・アイデンティティの希求が図られた。しかし、現実の政治のなかでは、「東亜新秩序」構想に換骨奪胎されていった。1938年のいわゆる近衛首相の「東亜新秩序」声明以降、この構想は、皇国を核心とし「日満支」を根幹とする秩序へと、アジア主義的発想から後退したナショナリズムに変化し、南方占領とともに「大東亜共栄圏」へと変質していった。しかし、こうした独善的な地域秩序の構想は大東亜会議に参加した地域のみならず、日本国内においても共通認識を得ることはできず、戦略的プロパガンダとして外交的・軍事的に利用されただけであった。

この貴志報告に対して、石崎氏は、近現代文学者としての立場から、大東亜の範囲は、ベトナムはおろかアフリカまで視野に入れた構想であること、また当該期のアジア主義は、明治のそれに遡ることができ、植民地支配に対抗する民族自決のうねりを吸収することを意図した構想であり、その動きと大東亜共栄圏との関係は検討が必要であることを指摘した。

また、三尾裕子氏は、文化人類学者としての立場から、貴志氏の、「東亜」「大東亜共栄圏」概念が理想主義的な戦略的プロパガンダに過ぎなかったという指摘を受け、これらの概念が日本の民俗学者の間でいかに認識されていたのかを、当時台湾で発行されていた『民俗台湾』という雑誌の文言から紹介された。さらに、「大東亜民俗学」が如何なるものであり、あるいはあるべきか、ということについての共有された認識は形成されなかったこと、「大東亜民俗学」を通しての時局への民俗学・民族学の協力と言う点も『民俗台湾』のメンバー達のスタンスは定まらなかったことを述べられた。この指摘は、学者世界においても「大東亜共栄圏」という地域概念をいかに解釈すべきかという点で多様な解釈があったことを示しており興味深い。今後多くの地域のさまざまな立場からこの地域概念を検討する必要が示された。

さらに、貴志氏が行ったイデオロギーをめぐる日中相互の言説分析の方法論の必要性は、時代も地域も違うが、フロアーから鶴田啓氏が指摘されたように、例えば秀吉の中国大陆へ出兵するという構想をめぐる、明側のほうで、あるいは中国側の関係者がどういうふうに動いていたかというような研究も出ており、そういうものも含めて東アジアを立体的に複数の視点から見ることが当然必要であると考えられる。

さて、大東亜という表現に関して、なぜ、東アジアはアイデンティティを求める動きが

強いのか、という指摘に対して、貴志氏は、日本では、東アジアを論ずることが好まれるが、中国・韓国では冷めた見方をしているとして、東アジアのアイデンティティを考えるうえで、地域内における相違が少なからず存在していることを指摘している。これは、中国の地位、プレゼンスの変化のなかで、東アジアとは何かが問いなおされている、という弘末氏の指摘とも通ずるものである。貴志氏によれば、最近の日本で使用頻度の高い東亜という呼称は、現代中国においては、1994年以降、地域協力の呼称として使用され始めているという。

東亜という表現に、「大東亜共栄圏」をオーバーラップさせる心理作用が、日本のみならず中国や韓国でも働いているのかどうかはさらに検討の余地があろう。しかし、東洋という用法に比べてみても東亜という地域呼称は、その範囲もアイデンティティも曖昧模糊としているという指摘には留意したい。「大東亜共栄圏」の研究は戦後、日本以外の地域においては実態的研究が不足してきたため、この点に関する明確な回答が得られたわけではないが、「大東亜共栄圏」構想は、それまでの日本の大アジア主義の発展形態としても、また日本帝国主義におけるアジア支配の拡大版としても、日本側の視点から一面的に理解することは困難であり、貴志氏のアプローチ方法は有効であろう。「大東亜共栄圏」における文学、音楽、映画、美術などが研究対象になることは、貴志氏が指摘するように、そこに「幻想の共同体としての地域」を描こうとする作用ないしは機能があったことを想定させる。さらには、日本側の構想や意図とはまったく別のところで、アジアあるいは植民地支配下にあったアジア地域内の相互関係を成立させている機能や権益処理システムに、潜在的な変化が生じていたことが想像される。このことは、深津行徳氏が指摘した4世紀末から6世紀中頃にかけて、日本列島・朝鮮半島・中国東北部に存在した複数の政治権力体という分析アプローチからもうかがえる。深津氏は、これらの地域が二分極化した中国の権威を背景とし、漢字・仏教・儒教という共通の文化的基盤を独自に解釈しながら、互いの存在を牽制しあう政治権力体が抗争を重ねていた実相を金石文にみえる君主号を手がかりに解明しようとしている。

3. 東アジアとは、いったい何か？

さて、これらの議論を踏まえて、われわれは、東アジアについて、何をどう論ずるべきなのだろうか。

第一は、東アジアは、歴史的な実態を有する地域であるが、その実態を、多様なアイデンティティのなかから、どれだけ明らかにすることができるのか、ということであろう。漢字文化圏、儒教・仏教・道教文化圏、冊封体制、といった特徴が、超時代的な概念としての中華秩序による地域認識につながってしまうことを避けるためにも、東アジアの地域アイデンティティを周辺地域との比較によって、より明確に論ずる必要がある。交易や交流、民衆意識、地域文化といったレベルにおける分析が不可欠である。そうした点で、

日本、中国、朝鮮という枠組みではなく、より下位レベルの地域からの分析が求められよう。

第二は、その地域アイデンティティが、近代世界システムのなかであって、どのように変質したのか、というプロセスを明らかにすることである。その際重要になってくるのが、地域を多角的立体的にみる視点である。小風氏が指摘したように、19世紀後半期以降現在に至る日本と中国の対抗関係は、東アジア地域の基軸国の座をめぐる争いであり、両者の力関係の変化のなかで、あるいは中国の地位やプレゼンスの変化のなかで、東アジアは問いなおされているのである。さらに、今回のシンポジウムで検討されなかった琉球、満洲、台湾などの地域アイデンティティの形成の問題も、地域内における基軸国との関係を抜きにしては論ずることはできないであろう。また、東アジアの地域概念は、大きく伸縮しており、東南アジアとのボーダーも、ASEAN +3という国際秩序の枠組みのなかで低くなりつつある。しかし、経済的なボーダーレス化が進展するなかで、政治的アイデンティティは強化される傾向にあり、国というアイデンティティがなぜ東アジアでは強固に国民を統合しているのか、という問題は現在のものである点には注意したい。そのなかで、この10年間に中国のプレゼンスが向上し、それにとまって基軸国としての日本の座が大きく動揺していることが明確になった。その一方で、東アジア圏域内で東アジア論が盛んになっているということが何を示すのかを検討することは重要であろう。

第三には、東アジアの歴史を理解するためのメソドロジーの模索が、なお必要であるという点である。フロアーから本野英一氏は、領土とか領海を分割する基準は何かを考えるよりも、ある空間領域に住む人間集団の支配者が使用する言語と統治原理を重視する立場が必要であると指摘された。また、小峯和明氏が指摘されたように、方法論的には政治論と文化論の交差を試みる必要があるだろう。今後は、こうした指摘にもとづいて、国家より下位レベルの地域や社会集団の事例を検討することが求められる。さらに、地域認識やアイデンティティを論じる場合には、このシンポジウムで意図したように地域研究のお互いの乗り入れ、そして前近代、近代、そして現代の歴史的な接合がいっそう必要であることは強調しておきたい。

今回のシンポジウムでは、多様な研究者の活発な討論が交わされたが、時間の不足は否めず、全体としては問題提起的な形での報告や発言が多かった。それゆえ、議論の焦点をめぐって問題を具体化させ、国というレベルから地域に即した問題へと深化させるという点では課題を残したが、多彩な研究分野からの多様な指摘は、相互に大きな刺激を与え、今後の研究の種となったことは、間違いない。今後計画される類似のシンポジウムにおいても、論議の土台を形成したものとして評価したい。

本シンポジウムの成果は、2005年6月、溪水社から『「東アジア」の時代性』として刊行される予定である。

(Hidemasa KOKAZE, Toshihiko KISHI)